10月27日　　マタイによる福音書10章26～33節
「神様への畏れ」

我々が生きる中で恐怖を抱くものがいくつかあると思います。例えば「暗いところが怖い」「お化けが怖い」などの、何か根源的な、人間として持つ本能的な恐れがあります。本能的な恐れの他にも、理性的な判断としての「恐れ」もあります。お腹が減ることが怖い、お金が無くなることが怖い、これからどうなってしまうか分からない将来が怖い。時に不安や絶望という形で現れる「恐怖」もまた、私たちの人生に大きな影響を与えます。だからこそ、私たちは時にその恐怖感を和らげる何かを求めて、人によっては何かに依存してしまったり、人によっては私たちと同じ信仰にたどり着くことになるのです。そして、根源的な意味でも、理性的な意味でも私たち人間が最も恐れるものは、やはり「死」というものなのだと思います。

今日の個所においても、また直前の箇所においても、死を前提にした「迫害」が、弟子たちの前に迫っていたことが示されています。ここでは、イエス様が十二人の弟子たちを宣教のために遣わせて、しかし彼らが迫害に会い、「わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる」というほどに、激しい迫害に会うことが示されていました。

しかし、そのように命を脅かされるような状況においても、神様のほかに恐れるべきものは何もない、だから恐れることなくこの世に出て生きなさいという力強い言葉がイエス様によって語られています。今日の個所で繰り返されている、力強い「恐れるな」という言葉、その言葉は弟子たちにどれほどの力を与えたのでしょうか。

1羽であればもはや値段をつけることが出来ない、価値が認められないすずめに対しても神様の支配がおよんでいることを示しながら、イエス様は「すずめよりも優れたあなたたちの命もまた、神様の支配によってその時が、その意味が定められている」ことを弟子たちに語ります。弟子たちに迫っていた迫害による殉教も、殉教しなかった弟子であるヨハネの大往生も、そして私たちの命の初めから終わりまで、全てに対して神様の意志が働いています。このような、神様が行う絶対的な支配をこそ恐れて、他の何かに支配されてしまわないように、イエス様は忠告を行っていました。

私たちもまた、この世に生きる他の誰かではなく、「神様を恐れる」ことによって、神様が本当に大きな力を持ち、審きを担う恐ろしい方であることを自覚することになります。それと同時に神様のことを畏れ敬って、大きなことを成し遂げない小鳥をも大切に養ってくれる神様の慈悲深さと恵み深さを感じることによって、私たちは神様の存在をより身近に感じることが出来るようになるのです。神様は私たち人間に比べてあまりに大きい存在であり、しかしその神様が私たちのことを守り支えてくれていると考えれば、これほど心強いことはありません。

この世の、どんな人が私たちに危害を加えようとしても、私たちの本当に深い部分、信仰や神様に対する思いには何一つ傷をつけることは出来ません。危害を加えられても、尊厳を傷つけられたと感じても、喪失や別れがあったとしても、それでもなお私たちは神様が共にいて、すべてを支えてくれるという信仰に、生きることが出来るのです。その心強さに支えられながら、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 10 章 26～33 節

- 26:「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠れているもので知られずに済むものはないからである。私が暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを屋根の上で言い広めなさい。体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れることはない。あなたがたは、たくさんの雀よりも優れた者である。」
- 32:「だから、誰でも人々の前で私を認める者は、私も天の父の前で、その人を認める。しかし、人々の前で私を拒む者は、私も天の父の前でその人を拒む。」